

# 沖縄を知るには

産経新聞  
新聞

産経新聞社  
那覇支局長

持田 浩一郎

沖縄を歩いてみると、本土で経験しない発見も少なくない。取材で名護市役所に行こうとしたある日、ふと目をやると、ずっと吸い込まれるような光景に出逢った。歳月の経過を感じさせる赤瓦屋根



昔ながらの沖縄民家でシーサーとネコが不思議な空間をつくっていた＝沖縄県名護市港

には、魔よけの獅子であるシーサーが睨みを効かせている。そこまでは見慣れた風景だったが、その下の「ヒンブン」にネコ二匹が、気持ちよさそうに猫背合わせで微睡（まだ）んでいた。沖縄独特のヒンブンとは、門と母屋住宅の間に立てられた屏風のような石造りなどの壁で、表通りからの目隠しで、悪霊を払うという意味合いがあるという。

トラ柄と黒色のネコと目が合うと、ヒンブンの上から「怪しげな奴」といった表情で、こちらを見返していた。その頭上にはシーサーが居座る。ここは沖縄。何とも言えない不思議な気持ちになり、そして、ほのぼのとした気分になしてももらった。ネコが去らないことを願いつつ、カメラ

のシャッターを切ったのが、このページの写真。後日、ネガをプリントして家の飼い主に持参すると、二匹は親子と分かった。その後、何回か意識してこのヒンブンを通り、顔合せの逆向き光景を期待するが、シーサーの下に「二匹目のネコ」はいない。

沖縄にはネコが多

い。特に地域ネコとも言われる野良ネコは那覇市でも公園を中心に多いように思える。本土のような冬が感じられないからコタツで丸くなる必要もない。何を食べているのかと思えば、深夜、公園近くを歩いていると、キャットフードをネコたちに与える人たちを何回か目撃した。ネコたちから「癒し」を感じるのか。ネコ嫌いの人たちがとっては迷惑な行為かもしれないが、これは、ある意味では相互助け合いの「ユイマール精神」につながるかもしれない。

沖縄サミットが開催され、基地問題も抱える名護市を訪れることは多い。那覇市などと違い、市街地が割りと区画整理され、裏道でも道に迷うことは少ない。ところが、那覇市、浦添市、宜野湾市などとはどうだろうか。地理に不慣れな人がちよつと裏道に入れば、方向音痴に陥ってしまうはず。特に沖縄では道案内板が少ないのが方向音痴に拍車を掛ける。私自身、某町役場や県立高校、図書館など公共施設への案内板がなくて、大回りをしてしまった経験を持つ。同町幹部に話すと、笑っていたが、当事者にとっては困った問題なのだ。

また、沖縄県庁周辺を歩くと、旅行者とみられる人に「どこです

か」と何度、尋ねられたことが。よく聞かれる場所は土産品店などが並び、その復興ぶりから奇跡の1マイルとも呼ばれる「国際通り」だ。にぎやかな通りが見えるのに分らないのは、近辺に道案内板があまり設置されていないのも一因ではないか。

同様に、案内板がないと思われるのは米軍基地である。国道58号沿いにある普天間飛行場、ゲート（出入り口）には、英語によるものはあるが、日本語の案内板は目にかかったことがない。観光客はフェンスに囲まれているから、漠然と基地であるというのは理解できるが、どの基地というのは分からない。基地があるというのも事実。観光立県を目指す沖縄は、年間観光客が五百万人に達しようとしている。内閣府沖縄総合事務局は主要国道の道路管理もしている。各自治体が調整のうえ、何とか改善してほしいのが・・・。

来年、沖縄は本土復帰三十年を迎えるとともに、新たな沖縄振興開発計画がスタートする。この原稿を執筆中に、同計画の成功への力ギを握る尾身幸次・沖縄北方担当大臣が就任された。沖縄を知るには、何より現地をこまめに訪れ、裏道に入るのが最良の方法だと思う。